

開発の現場から

曖昧な「わたしのもの¹」と「あなたのもの」の境界線 —フィールドワークの現場から—

松井 梓
一貫制博士課程3年
アジア・アフリカ地域研究研究科
京都大学大学院

2016年4月より、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の5年一貫制の博士課程に在籍し、モザンビーク北部に関する地域研究を行っています。かつて、開発の現場の前線で仕事をする開発コンサルタント企業に4年半ほど所属し、主にモザンビーク北部地域における開発援助案件に関わりました。この経験から、特に社会開発分野の開発援助案件を行うに際し、地域の人々や社会に関する詳細な知識や情報を把握することが重要であると実感しました。長期間の調査に基づき細やかな情報を蓄積し、それを必要とする方々に提供できる研究者を目指し、大学院に戻り現在に至ります。

今回は、モザンビークの普通の人々との生活の中で実感した、私がこれまで当然視していた考えが解体していった経験について、エピソードを交えながらお話しできればと思います。これを通じて、現地の普通の人たちの日々の生活の感覚を、少しでもお伝えできれば嬉しいです。

頻繁な貸し借り

2017年より断続的に、モザンビーク共和国北部の沿岸部に位置するモザンビーク島において、人々の中の食のやり取りの社会関係を明らかにすべくフィールドワークを実施しています。島では、ある夫婦の家に居候させてもらい、生活を共にしています。



島の家並み



ある日の軒先



日の出とともに出港する漁師

ある日、私が滞在している家の奥さんと近所の家を訪ねた帰り際に、奥さんがその家の入口に転がっていたサンダルを履いてその家を出ました。少しぎょっとして聞いてみると、「この家の子がうちに来た時、私のサンダルを履いて帰ったのよ」との答え。です

¹ 本エッセイの事例は全て筆者の調査で筆者が体験したのですが、「わたしのもの」という用語も含め人々の所有という行為を捉える枠組みについて、松村圭一郎氏の『所有と分配の人類学—エチオピア農村社会の土地と富をめぐる力学』（参考文献欄参照）を参考にしています。

がその言葉に、それを嫌がるようなニュアンスは含まれていませんでした。またある時には、近所の女の子が家の奥さんのカプラーナ²を巻いて、この家の料理を手伝わさされていました。その同じカプラーナは、数十分後にはこの家の子供が身に着けていました。さらに別の日には、一緒に歩いていた女性が、私が日焼け防止のためにかぶっていた帽子を指さし、「子供の帽子を持ってくるのを忘れちゃったから貸して」と言い、背中に背負った子供にかぶせました。たとえ私が使っている最中でもおかまいなしのようです。

他人がかぶっている帽子を借りるのみならず、日々の生活の中でたくさんのものが人々の間で貸し借りされています。魚を焼く網やケーキを作る型、ナイフなど、自分の家がないものを他の家から借りるのは当たり前。お使いに走らされた子供たちが、他の家から借りてきます。滞在先の家のものだと思っていた、木炭用のコンロの上にとずっと置かれている薬缶が、実は隣のおじいさんのものだと知ったのはそれを使い始めてから一ヶ月後のことでした。ちなみにそのコンロも、はす向かいの家から借りたものでした。

「悪く思われるかもしれない」、「その人も今日使いたいかもしれない」という心配が人々の頭をよぎることはなさそうです。ものを借りるだけでその人を悪く思う人はいないし、むしろ持っているのに貸さなければ心の狭い人だと思われるし（そのため私も日焼けは嫌でしたが仕方がなく帽子を貸すはめになりました）、もし借りようと思っていた相手がその日使いたいのなら、別の家から借りればよいだけのことです。

明け渡される部屋とベッド

モザンビーク島では土地が狭小であることから多くの人が家を新しく建てることができず、家を所有している人から一部屋間借りするなどして生活しています³。この様子を見てみると、家や部屋は、私たちが思うような、誰かが自分のものとして所有する思い入れや生活の匂いが染みついた空間というよりも、様々な住人が入れ替わり占有しては去っていく空箱であるような感覚に陥ります。例えば私の滞在先の家では、3つある部屋のうち家主夫婦は普段2つの部屋を使用し、もう1つは借し出すことが多いようです。しかし、去年は私を含めて2人が間借りしていたため、家主は自分たちの部屋のうち1つ目を私に明け渡してくれました。そして今年再度訪れると、去年とは別の人が家主夫婦の2つ目の部屋を占有しており、家主夫婦は去年私に貸し出した、1つ目の部屋に収まっていました。

さらには、家のすべての部屋が埋まった状態で客人が家に来た際には、家主は居間で寝、客人に自分のベッドを譲ることさえあります。魚焼きの網やケーキの型と比べても、日本人の感覚では家や自室、ましてや自分のベッドというのは、自分だけのものという認識が強いものではないでしょうか。日本でも自分が住んでいる部屋を貸し出す民泊が広

² アフリカの多くの国で使用されている、カラフルな色と柄が用いられる大判の布。腰から下に巻き、結婚式などに出席する際の正装としても、日常の服としても用いられます。また、荷物や赤ちゃんを背負う際に、風呂敷のようにしても用いられます。

³ 農村部や比較的的土地に余裕がある都市部の貧困層居住地域では、夫婦が一つの家に住むことが一般的であり、結婚すると子供は親の家を出て、新しく家を建てます。よってこれらの地域では、居住の在り方が本文の記載とは異なります。

がりつつありますが、自分が普段生活する空間を、一時でも他人に占有され使用されることに抵抗を感じる人も多いはずです。また、恐らく日本の多くの家庭には、家族は普段使わない客人用の布団があるでしょう。しかしモザンビーク島では、自分の部屋も、さらにはベッドであっても、「自分だけのもの」ではなく「あなたのもの」になり得るのです。

誰かが持っているものは、分け与えられるべきもの

貸し借りだけではなく、人々はその時自分が持っていないものを他の人に分けてもらい、また自分が持っている何かを他人から分けてほしいと求められれば、持っていることを隠して独り占めすることはせず、淡々と必要な量を分け与えます。話を聞いてみると、今日自分が持っても明日は一文無しになるかもしれないという不安定な暮らしの中で、今日は自分が乞われる立場であっても明日は自分が乞う立場になるかもしれないという考えが人々の意識の中にあるようです。日々、料理を作るために使う木炭、主食となる米やトウモロコシ粉、味付けに使う塩やお茶に入れる砂糖などが、開け放されている裏口のドアを行き来します。私の滞在先の家族が本当にお金に困り、家主の夫がこれまで周囲に貸したお金をかき集めながらその日暮らしをする中でようやく買った4本の煙草でさえも、うち1本は家にふらりと訪れた比較的裕福な親族の女性に遠慮なく乞われ、その女性のものとなりました。

この分け与えるという振舞いが、かなり幼少の頃から人々に染みついたものなのではないかと感じさせる出来事がありました。ある日、私の滞在先の奥さんが務めている幼稚園に見学に行かせてもらいました。11時ころに通りの活動が終わり、あとはランチの時間です。親が家から持たせたランチボックスを広げ、子供たちはジュースやパン、ビスケットなどを食べ始めます。すると3人の先生たちが子供たちの間を回りながら、ある子の持って来たジュースを手にとって飲み、別の子のランチボックスからビスケットをいくつか取って食べ、また別の子が食べていたパンを半分に分けて食べています。呆気にとられてそれを見ていた私の所にも、滞在先の奥さんが子供たちから集めたクッキーやパンを運んできてくれました。驚いたのは、自分の食べているパンやおやつを先生たちが取って行っても、子供たちは表情を変えることなく、伸びてきた先生の手を視線を上げることなく、言葉を発することもなく、黙々と食べ続けて（あるいは食べることもなくたたずんで）います。「先生たちと食べるために親が持たせているのよ」と彼女が説明してくれましたが、それでも日本の感覚では不思議な光景に見えました。日本では、例え親から「先生たちにあげなさいね」と言われて持たされたとしても、子供たちは自分の食べる分が減ることへの抵抗を態度で示すのではないかと思います。“他人に分け与える”という行為が子供たちにとってさえも自然であることに、驚きを感じました。

「わたしのもの」と「あなたのもの」の間

このように頻繁に物のやり取りが行われる島において、誰かにものを貸したり分けたりした後に、「ありがとう」という言葉が発せられることはほとんどありません。ある日

私が滞在先の奥さんに「10MT⁴ある？」と言われ、「はいはい」と財布をさぐってお金を手渡したとき、奥さんは黙って受け取りました。しかしその場にいた旦那さんが、恐らく外国人に対してはそうした方がよいという考えからすかさず「ありがとうございます」と言い、それを聞いて彼女は「ありがとうございます」と言ったのでした。しかしその後も電話を貸したときなど、彼女が「ありがとうございます」と言ってくれることはほぼありませんでした。

彼らが「ありがとうございます」を言わないのは、誰かが豊富に何かを持っていたらそれは当然分け与えられるべきものだからなのでしょう。購入して取っておいた「わたしのもの」である米やトウモロコシ粉も、他人に乞われればあっという間に自分のものではなくなり、分け与えられて「あなたのもの」になっていきます。エチオピアの農村社会を調査した松村氏が、『わたしのもの』がまるで私のものではないかのように扱われてしまう（松村[2008]、p.ii）、『わたしのもの』は、いったい誰のものなのだろうか？それは、どこまで『わたしのもの』でありうるのだろうか？（松村[2008]、p.vi）」と述べるように、それはさながら、ある人が所有しているものでありながら、その権利は常に他の誰かにも開いているかのようです。松村氏のフィールドのみならずこの島においても、「わたしのもの」は決して独り占めすることができない、「あなたのもの」との間で常に揺れ動く、曖昧な境界を持つものなのです。



フェイジャオン豆のカレー



魚のココナツツカレーとシマ⁵



魚のフライ、サラダとシマ

人々の間のやり取りから生まれる食事たち

曖昧になる「与える側」と「受け取る側」の境界

もちろん私も、家の中や島のいたるところで多くの人に乞われます。これまでの私は、「わたしのもの」の境界をくっきりと引き、街角でお金や物を乞われた際、断るようになっていました。それは、「私は一時的な滞在者に過ぎず、私がこの一時だけこの人にお金や物を与えても長期的に見てその人のためになるわけではない」という、学生の頃から染みついた考えからでした。もちろんこの考えに正しい面もあると思っています。しかし、島で暮らす中で、この考えが変わりつつあります。

それは、島の人たちが私にも分け与えてくれることを知ったためです。私が食事時にと

⁴ 2018年10月のレートで約18.5円。パン4つ、小さなトマトが10個ほど購入できます。

⁵ トウモロコシ粉をお湯で練ったもので、アフリカ大陸の多くの国で主食として食べられています。国によって呼び方が異なり、例えばウガンダでは「ウガリ」と呼ばれています。

ある家を訪れれば、多くの場合日本人の私にも”Servido.” “Karibu.”（どうぞお食べなさい）と声をかけてくれます。子供でさえ、彼らが食べているところを通りかかると時に同じように声をかけてくれます。滞在先の奥さんが、自分のお金で買ったマンゴーを私にも分けてくれます。私がお腹が空かないように、食事の際には私のお皿にたっぷり、時には自分の分よりも多く食事を盛ってくれます。お金がないときにどうにかかき集めたお金で用意した食事です。夜中に大雨が降り家の中に水が降り込んだとき、起きて私の部屋まで来て、「ベッドの上に雨が降っていないか、荷物にかぶせるビニールシートはあるか」と尋ね、自らの荷物よりも私の荷物を優先してビニールシートを使わせてくれます。私がこの水道水を生のまま飲むことができないのを知っていて、滞在先の奥さんが参加したとある研修で配られたペットボトルの水を毎日私のために持ち帰ってくれます。

乞われても何かを与えてはいけないというのは、常に乞われ続ける立場にありそれに辟易していた自分が、乞われても与えないことを正当化する論理だったのかもしれませんが。少なくとも、そのように考えていたのは自分が常に与える側であったためなのだと思います。与え続ける立場ではなくなり、島の社会に巻き込まれる中で、人々が私にも分け与えてくれることを知りました。そして自分のものを与えることが間違っただけであるという感覚は少しずつ減り、私も乞いに応じて「わたしのもの」と「あなたのもの」の境界を緩めていくようになりました。

乞いを受け入れる

日本人は私も含め、他人に甘えること、他人に迷惑をかけることが得意ではないように思います。それぞれの個人や家族の生計は家の中で完結し、親族や親しい友人であっても困窮した際に助けを求めることはできる限り避けられるでしょう。しかし、自分も他人に迷惑をかけたり依存したりしてみると、他人に迷惑をかけられ、依存されることがそれほど嫌でなくなることに気がつきました。例え自らが困窮しているときでさえ、乞われたものをためらいなく分け与える島の人々を目の当たりにすると、いつもその懐の深さを感じます。しかしそれは、自分が同じように他者に乞うことができること、また乞うてきたことの裏返しなのでしょう。「わたしのもの」と「あなたのもの」を曖昧にしていく島の人々を見習って、もう少し他人に甘え頼りながら生きてみようかと思うようになりました。そうすれば、自分が甘えた「うしろめたさ（松村[2017]）」から、誰かから求められた助けにもっと素直に応じることができるようになるのかもしれませんが。

参考文献

- 松村圭一郎[2008]『所有と分配の人類学—エチオピア農村社会の土地と富をめぐる力学』世界思想社。
———[2017]『うしろめたさの人類学』ミシマ社。